

吉良流札法とその継承者たち

—東京大学総合図書館蔵『吉良流四卷書』から見た—

谷 口 雄 太

一、はじめに

東京大学総合図書館蔵『吉良流四卷書』¹⁾は、その存在自体は既に知られていたようであるが、史料紹介や翻刻、解題に関してはまだ行われていない。よって、本稿ではその翻刻と解題を行う。

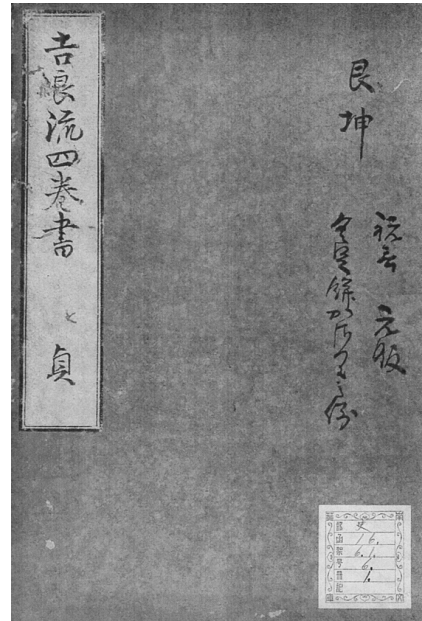
本史料の詳しい解題は第三章にて行うつもりであるが、予め簡単に翻刻と解題の意義について触れておきたい。まず、本史料は東京大学総合図書館の書庫に存在しており（請求番号G38518）、木下聡氏の御教示によってその存在を知ったことを初めに明記しておく。次に、内容であるが、史料名が示す通り、吉良流札法に関する書である。写しであるが、奥書に、天正十五年（一五八七）、天和元年（二六八二）、天明六年（一七八六）、文政六年（一八二三）とある。特に、天正十五年（一五八七）の奥書は注目され、内容に戦国期武蔵吉良氏関係者の人名や記述が散見されることから、史料批判を加えた上で中世史料

として本史料は使用可能であると考ええる。また、奥書に喜多見氏や武蔵国世田谷の文人、石井至穀（平盛時）の名が見られることから、近世史料としても使用可能である。さらに、本史料と他所に伝来する吉良流札法書とを比較することで、未だ十分な研究がなされていない吉良流札法の具体相についても明らかにできるものと考ええる。また、中世三河西条吉良氏（御一家）が近世吉良氏（高家、故実家）へ移行していく過渡的な様子も本史料からは窺うことができるものと考ええる。ともあれ、これ以上の検討は第三章で行うことにして、早速、翻刻から見ていくことにしたい。

二、史料翻刻（補足は（一）で表し、朱は傍点で示し、頁は史料に基づき適宜振った）

（一）

艮坤 祝言 元服 具足餅かさり之例



(2)

艮之篇 四卷八篇七拾ヶ条之内

祝言の事

〔考武館〕、「南葵文庫」、「東京帝国大学図書館」の印アリ

(3)

〔玉川文庫〕の印アリ

吉良流武家故実

祝言の事

一、祝言の道具の事、是ハ不定、大身小身によりて道具の数も替る間、一樣にハ有へからず、大形見て能様ににも出すへし、小身なる人ハ先一番に貝桶を先へ持せ、残の道具ハ順に出すへし、亦大名などのハ替る事、

一、壺番二代物、二に折かさ、三に葛籠、四二樽、五二行器、六二御

前行器、七二総長持、八二上長持、九二荷ひ、十二屏風、十一二葛籠、十二二挿箱、十三二大棹、十四二御厨司黒棚、十五二寄掛り、十六二貝桶、十七二萬事手物道具、十八二長刀、

(4)

十九二乗替の鉤輿、廿二本の長柄三丁先へ遣りて四番目に本の長柄を遣るへし、已上、合長柄ハ三拾六丁のものなり、鉤輿ハ数不定候間、道具の儀ハ際限なき間、大形如斯なり、

一、請取渡の事、萬事道具共並へ、右の方へ輿を立、長まへに臺をして置へし、亦請取人ハ左のかたゝ指出、先両の送迎の人、指ハ大形太刀、折紙を取替して、扱其後、貝桶を渡受取候て立へし、相残道具ハなり次第なり、長柄の立所ハ何時にても右也、但し、所の模様次第にて候、口伝あり、受取渡の時、色々作法あり、先々如斯、口伝具ニ有之、道具迎の人の長刀、折紙請取渡の事ハ、先々男の方より出し、其の後、女の方を出すなり、長柄の前にも様子によりて礼あり、

一、祝言の時ハ本ハ烏帽子、素襖なり、刀、脇差の下緒能たる也、是を祝言の時ハく、り股立といふへし、股立をとりてまた本ハは、きをするものなり、亦ハ蠟燭ハあかきハせず白きカ本儀なり、

一、挑灯か又松明をともしたり、右の役人ハ右の手にて松明を持へし、左の役人ハ左にて持へし、

一、御厨司黒棚を持て行はとなる所にハ、座敷の立様も常々替るなり、萬事道具取置、かさり様有、此式法ハ当世ハ不入、黒棚ハ名有人ならては持せず、か様の事ハミなく、当世替る

(5)

なり、

一、御座敷にて祝言の事、先引渡に長鮑、昆布、栗、又其次に雑煮、吸物、此時先三々九度の酒なり、三度出へし、其後食を出すへし、此膳にいろく有上ハ□^マの膳なり、是ハ献方の者ならては仕立る事ならず、亦中ハ七五三也、亦五々三なり、また三々二なり、七五三にハすこし口伝あり、

一、輿舁寄る事、椽より一枚ハかりとおなしき時、指寄、長柄をとり、網をはつまへ、輿の中なと迄中へ入、妻戸を押立て、椽より下に後むきて畏るへし、内より輿をた、かる、かまた御例にてよきと程あらハ、立て輿を引寄、長柄を取、輿かき指寄てかくなり、亦御附候時も同前、輿かきハ庭の椽迄かく、其後ハ輿へハ誰人も舁へし、輿を寄る時、又こし受取渡のとき、上手下手の次第有、左は上手なり、右分御出の時も御輿の時も同前の心、口伝あり、

一、祝言の時の酌ハ、送に廻る時の廻りと同前なり、結酌と申候取様なり、口伝に有、左の方へ出して加へるなり、

一、祝言の落着たる時、髯の方ハ舅の方へ酒、肴、太刀、折紙、姑のかたへハ小袖、酒、肴、同約束の女房の方へも小袖、さけ、肴あり、其外召仕已下へも進物有へし、但し、略儀などにハ其人の心に任すへし、

(6)

一、舅よりも祝言、進物已下同前、其約束の女房ハハ返し無ものなり、一、嫁入の夜、舅の方ハ迎ひ小袖とて、小袖、酒、肴を遣すもの也、同人によりて、伴の衆達もそれく随て遣事も有之、

一、輿請取渡の事、左の役人其一家の役なり、右の役人ハ家の老の役なり、請取方も同前、其時之様躰口伝にあり、前後とて輿の向返る事大きに嫌ふなり、何も役人素袍袴にて出へし、輿を舁すへ請取わ

たし過て輿の前に屏風を立、女房の方より酒出るなり、輿の内へ参らすなり、おなしくハへも女房なり、女房参たる盃を局とりて公行に居、屏風の際まで出し、酌の方へ渡なり、請取て公行ハ盃をとり、小角はかりにて、左の酌たる人にて一本ノ吹渡したる方へも一礼して吞なり、亦かへる所へ小袖に太刀添て出る也、又人に寄、太刀はかりも或ハ小袖計も出事有へし、扱其盃をわしたし候左の役人吞なり、亦請取方の右の役人江差なり、引出物同前なり、但し、わしたしたる方の右の役人吞なり、何も一礼宛にて吞へし、互に老より壺人ツ、吞て納るなり、

一、迎ひの方より酒出る、渡し候左の役人吞候に進物同前、其盃を受取たる方左の役人吞、又右の渡手吞、是も進物同前なり、右の役人請取て吞、一兩人吞て納るなり、

(7)

一、庭の松明の事、指入門のわき左右に燈す事中間の役なり、二親在者に素襖袴にて働せへし、打合のもちとて妻戸前にて輿の左右男女兩人ツ、にてつきて輿を通すへし、跡にて左の方を右の方へはたと打合、男の方より白へ打入て退へし、男はいつれも二親有者の役なり、

一、紙燭さし、妻戸の際にて輿の左右に蠟燭をともし、輿の前にて右の方ハ右の手に持、左ハひたりの手に持、右の方より左の方へ取わたり、扱輿を通して静々と押合て消すなり、是ハ何かしの役なり、出立同前、二親持たる者勤むへし、輿寄これも侍の役也、二親有もの、役なり、左右の長柄に兩人手を掛、妻戸迄かきてそこにて舁すへ何も立退る也、さて又輿の内に立たる刀を局にてもおとなしき女房是を取て輿添の何かしに渡すなり、小袖の上に置刀是なり、

一、舅の方より女房衆迎に出、案内して入へし、

一、待女房其位によりて、座鋪のすゑ又ハ椽迄迎ひに出る也、扱化粧の所迄同道して往へし、其所にて化粧をも直し候て装束をあらため、此時白小袖を着て座敷へ出るなり、

一、男の方への小袖、素袍袴、其外置様の次第、広ふたに畳紙、扇脇二置へし、素袍袴一、小袖一、刀一、帯一、脇二置、

(8)

男是を着して座敷へ出て祝言有、

一、座敷の様、女房ハ主居、男ハ客居たるへし、先待女房対し居へし、さて男出られ候ハ、人によりて下にも直り、又其俣も居へし、時宜によるなり、

一、座敷の喰物の事、二重、左に手掛の前二置鳥、右ニ手掛の前に置鯉たるへし、

一、□(病垂れに宗の字)の膳、二重と手掛の本の中に置へし、瓶子一具、蝶花形に包、女蝶ハ右に鯉のかたに、男蝶ハ左に鳥の方に置へし、銚子ハ女(男を見消)蝶、くハハ男蝶なり、

一、銚子、提子、蝶花形に包、銚子左(右か)に、提子右(左か)に有へし、男出候て三盃を公行にすへて酌取持て出、女房のかたへ寄て置(居を見消)へし、さて引わたしすゆるなり、

一、酌とり式人出て、おなしことくに瓶子を取て下座に置、亦くハへする人出て、銚子、提子をととりて下座にてくハへを持て居候時、心得たらん女房衆二人出、女蝶の有瓶子を取、口をととりて蝶をあをむけて置、さけを提へうつし、又男蝶の瓶子を取て、口をととりて蝶をうつむけ、女蝶の上に重ねて酒を銚子にうつし入、瓶子にもとのことく口をさして待へし、三献ともに如此口をさして待へし、

一、壹番に引渡し出、女房吞初て二度加へへし、さて男の方へ行へし、先男是も二度加るなり、吞たる盃の下に男重ねて

(9)

置へし、扱盃又上座に本のことく置へし、二番に打味出る、右のかた方居へし、扱酌取出、公行を取男の前へ持てゆく、男吞さして女房吞なり、加へ様同前、さて盃を上臈受取候て下を捨、亦下に重ねへし、又本のことく上座に置、三番二わたり左のかたに居へし、扱酌とり盃をととり女房の前へ行吞せ、亦男吞へし、加様同前なり、いづれも二度ツ、加る也、以上、三々九度なり、此時酌の取様第一の儀なり、条々口伝有ものなり、

一、式三献のさけ過て、吸物にて一献あり、待女房其外各々へも酒あるへし、次に雑煮出るなり、扱さけ一献あるへし、其後食を出すへし、其上一献も有へし、以上五献も七献も時のほとに寄へきなり、一、毘殿両親より祝言の事、二重手掛、置鳥、置鯉、長持に入、さて三荷三種五種或ハ十荷十種など人に寄て遣すへし、

一、餅ハ五百八十行器に入て是も遣すへし、

一、馬、太刀同女房、姑へ小袖たるへし、但し、人に寄ての事成へし、一、我か所にての祝言の盃過て始て見る所とて姑のかたへ行なり、姑二所へハ小袖、或ハ小姑其外女房衆下女迄もそれ／＼に随て仕立物、板のものの坏、帯已下人により進物有へし、

(10)

姑の方方も引手物有へきなり、

一、女房衆衆かた宮仕有へき事、何も腰巻をありて能々、御酌を被取候事、銚子の柄を紙にてくるミ、右の片手にてよこに取て能候、一、提子の事、御酌に打続て能御入候、加する人酌より遠く有事あし

く候、

一、加へ申候事、何時も左の方へ銚子を指出してくハへ申候、

一、御盃ハいづれも土器盃にて御入候、総別女房衆に不限事にて候、ぬり盃ハ略儀にて候、

一、盃居候臺ハ公行能候、乍去ことに寄小角に居て公行二置事もあり、亦へきに居て公行に置事もあり、

一、御酒参之時ハ、右の手片手にて参候、人により賞翫の盃なれば、女房衆も頂き申か能候か、手にてそといた、き候、いづれも左の手をは突たるか能候、

一、宮仕する人、腰巻に手を掛けて引立候、心持にすへし、

一、御酌取人片手にハ銚子を持、左右の手にてハ公行の狭間へ手を掛けて持申候、いづれも口伝あり、

一、供御参候事、御介しやくの人右のものなり、左の手をはつき候て、そと供御を臺に置なり、参て能候、さて御汁を参候時ハ箸を置候て、右にてそと取上て御吸候て下二置、扱

(11)

箸を御取候て汁の身を参候て能候、

一、おかずとハおもわりの事なり、何なりともむつまじくなを箸を御附候て能候、大方中のおかずより参初て能御入候、

一、二、三の御汁を参候も已前のことくにて候、供御を御附候而からハ御汁おかす参候、幾度も加さへ御附候て能候、介酌の人御入候時ハ、かさへ分て参らせ候へハ、亦かさへ分られ候而参られ候へし、
一、御酒過て湯参候時ハ、箸を不取して湯計御請取候て参らせ有へし、
一、御相伴の事、衝重に狭間を明申事、四方ハ一段の位有大事にて候、扱三方も賞翫にて候、大形の人ハ二方、又人によりて一方ハかりも

明申候、又如何に御相伴なり共、さまの明さる臺にても参候、亦臺のなき御方も参候、何も／＼先々此分記し置れ候、

(12)

右此書者、金龍寺殿御代、被補関東旗頭之時、准京都上ノ吉良殿之例、弓馬及武家之式礼被定置所、尚又今般、参考 西條殿御本而、令増補省略書写者也、

天正十五年八月廿三日 関 加賀守 在判

石井石見守 同

右、当家伝来書、更書写畢、

天明六年丙午三月日 石井市郎右衛門兼昌在判

文政六年正月、副本出来、仍加奥書了、

平盛時

(「吉良流武家故実相承」の印アリ)

(13)

坤之篇 四卷八篇七拾ヶ条之内

懷妊帯祝の事 喰初の事 髪置の事 袴着の事 元服の事 十能名目の事 七芸名目の事 吉良流正月具足餅飾の事

(14)

(「吉良流武家故実相承」の印アリ)

吉良流武家故実

懷妊の帯祝の事

一、いはた帯ハ、すゝしのきぬ長サ八尺四ツにたゝミて其男ゆふなり、是ハ唯其当座祝言迄の儀なり、扱誕生候ハ、彼絹をねく候而、か

に取を附候而きるなり、色ハ薄青きたるへし、是ハ百日過ての儀なり、紐にハ此きぬをもろくしてひとつ付、是ハ産着にてハ無之候なり、

喰初の事

一、生れて百廿日といふ日ハ、善惡を不嫌喰初有へきなり、

一、男子をは男可養、女子をは女養ふへし、

(15)

一、をさなきものを抱きて出るを、喰初の親請取、左の膝の上にて置、所へ膳を居るなり、

一、膳の様、鉢食の上二而鯖をちいさくほうしつ形にきり置へし、扱やしなひの人、箸をとりて、鯖右の手先に皿の際に置、食をミはしく、む物なり、汁をもく、む候真似をするものなり、

一、餅を五ツ膳の左の方に居るを、後見の人取て寄るを亦三箸やしなふなり、此餅ハ五ツを代物過分にて買取へし、程らいハ人ニ依へし、條々口伝、

一、如此く、めあけ候而、則、刀、脇差、或ハ馬、太刀など何にても人により時に随ひて出すものなり、扱酒の時の遺物の儀ハ人々の心に随ふへし、

髪置の事

一、男女ともに三歳といふ霜月十五日に良辰を撰て祝言あるへきなり、

一、祝言の様、箱ふたに櫛、鋏、もとゆひ、水引、綿、のし一ふさ、薬七筋添て出すへし、又根引の小松をも置へし、但し、男女の松あり、

一、髪をゆふ事ハ、おさなき者を置、女のかたへ向て、髪置の親はさみて、男子をハ左の髪をそと三ツ鋏て、右のを三ツ

(16)

鋏ミ、中を三ツはさむなり、中ハ巻目をはさむなり、能々心得へし、已上九鋏はさむなり、扱わたをのへてひたいより後へ長くかけ、其外、下ら、長鮑、昆布、麻苧七筋わたにゆひ添て、ねをもゆひ候て、帯などのことくに男むすひにして、扱中を水引二筋にて、女結にして、扱さけあり、遺物の義ハ、右に記すことく人々の心に随へし、

一、女子をは女の役なり、是ハ右のかたより鋏ミ初るなり、様牀前なり、扱祝のさけ有へし、条々口伝、

袴着の事

一、広蓋に素襖袴、扇子、刀を居て置へし、

一、袴着の人ハ白衣にて出へし、

一、碁盤の切目を玉女のかたへ向て置、袴着る人を玉女と向ハせ、碁盤の上に立せて、扱襦着の親さし寄所へ後見の人兩人左右へより候て素襖を渡す、着る人手をかけ左の袖より手を通させ、扱袴の前腰を当る、是も左のあしに着せはしむるなり、

一、きせ上て我さしたる刀を祝て着せ、おなしく太刀又ハ何成とも出すなり、

一、始出したる刀をは、其俣内へ入るなり、扱式三献のさけ有へし、其後ハ互に心に任すへし、

(17)

元服の次第

一、烏帽子親の所へ行時、酒、肴、馬、太刀にて行事も有、いつれも人によるへし、

一、童形の時、人によりてちやうけんを着（附を見消）へし、髪をはやして烏帽子上下たるへし、是ハ酌の事なり、

一、先引渡にて冷酒一献ありて、髪をはやして次の座へ立て、烏帽子、素襖を着して出、式にハ三献にて有へし、此時、烏帽子親の方へ遣し物有へし、式三献過て乱酒に成候而、遣ひ物之義ハ互の心に任すへし、髪をはやし候上者、一字を与ふ事も有、亦烏帽子名を付候ても主の好次第たるへし、

一、髪はやす時、盤の事、柳を長サ壹尺式寸に五角に作るへし、高さ七寸計たるへし、

一、新しき小刀をと（そを消）きて、杉原にて柄を包みて、先杉原を豎に折て、亦横に折、柄を順に小刀の面の方に巻留メ、ふくさ紙よりにてかしらふさぎにして一結ゆひてつまへし、髪のをまりを小刀の裏の方へ折て、面のことくにまた結へし、

一、髪を巻紙の事、杉原を豎に折て、又横に折、長き方の中にひたを壱ツ折なり、此ひたの中に左を巻たるには

(18)

右と書、右を巻たるにハ左と書なり、

一、行（きやうを消）の髪結様の事、元結を後より結、男結にして折返し、はしをきらす、其次を前より女結にして折返し、端を不切、其次を前にて男結にして前のことく、又次を女むすひにゆるくはしを切なり、其次のはやすへき所を男結にめてゆひ、端をきるなり、或ハ下計へたて順に巻、其上のはしを女結にして、はしを男結に折返しきる也、

一、髪結て、或ハ後見の人へ柳の盤に小刀を置いて持、出はやし手の前に置候時、元服の人立寄て盤の上へ俯向て在時はやすへきなり、

一、はやし様着寄てひさまつき俯向たる所を能々持て、左の方の髪の際を一刀にやり刀にはやし、我右の袖へいれ、扱右の方も一刀にや

り刀ニはやし、我左の袖へ入、ふところの内にて取違へ、主にしらせす後見の人に渡すなり、亦後見の人請取懷中すへし、其後人に依て氏神或は其所の社頭に可納なり、是ハ一方ならぬ人の儀なり、

一、草の髪結様の事、もとゆひを後方男結にして折返し、はしを不切、中ほとを前方女結にして、はしを不切、はやすへき所を男むすひにして、端をきり、式分隔て紙にて巻、其上を男むすひにして、はしを水引にて女結にして折返し、端を

(19)

不切なり、髪をはやし様ハ行のことくなり、

一、盤と小刀ハ烏帽子親の所より出すへし、櫛、もと結などハはらひに入、烏帽子親持て行へきなり、条々口伝、

前ニて水引 前ニて おなしく おなしく 後方寄

(図アリ) 行

女むすひ 同不切 男― 女― 男結

男不切 女 男 女 男 女 男不切

同 同 同 前ニて 後ニて

(図アリ) 草

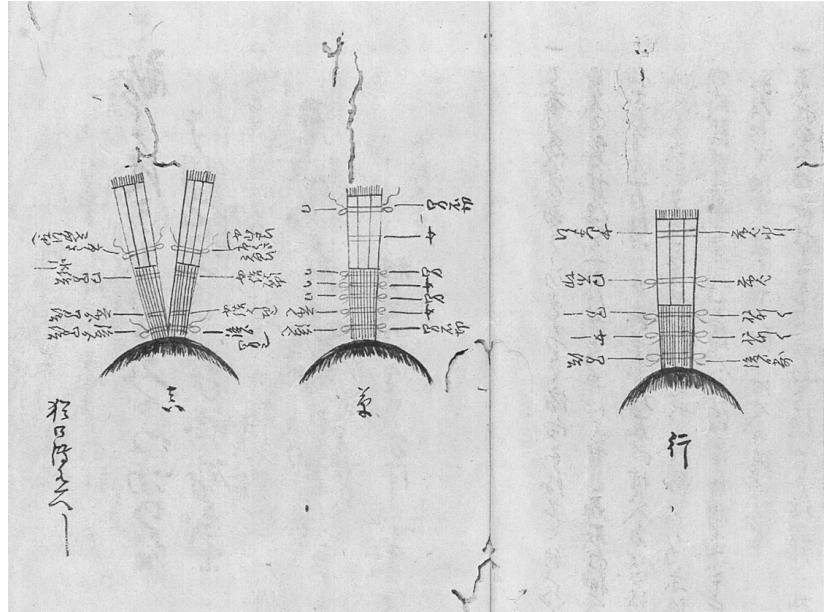
女むすひふくさ元ゆひ 女結はし不切 女結はし切也 後方男也

同 同 同 前ニて 後ニて

ふくさ元ゆひ本也 同男結水引 前方男結 後方男結

(図アリ) 真

猶口伝有へし、



(20)

敵にはうしろをみせぬ功の者(香物) まつ先かけ(梅花) て打勝雄
武士(松魚之節)

香物 立割二して仰向る
右申伝之本歌二而 梅花 花無時ハ梅干を用

松魚節
秘事の意と申習はし候事

十能の事

一、弓 鞠 庖丁 馬 躰 箏 歌 連歌 盤上 物書 以上是なり、
七芸の事

一、か歟(小を見消) き物 音曲 鼓 相撲 りかた 物云 舞 以
上是なり、

敵ニハうしろをみせぬ功のもの(香物) 真先かけ(梅) て打勝雄ふ
し(松魚節)

一、吉良流ニ而鏡開之節 喜多見久太夫殿已来

正月十四日

此二様ハ近頃除之不用

からし菜、田づくり

向 花かつを

梅ほし花もるもよし 汁粉

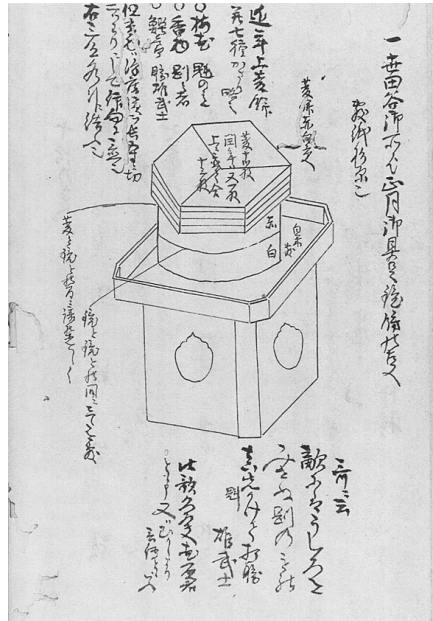
かうの物二割仰向て

(21)

一、世田谷御所ニて正月御具足鏡飾の事

敷紙杉原也

近年上菱餅并七種かさり略之、菱餅赤白交、菱十式枚間年ハ又一枚
上二置て合十三枚、菱と鏡との間ニ讓葉をしく、赤、鏡と鏡との間
にしたを敷、白、白米敷(図アリ)



○梅花 魁の意

○香物 剛之者

○鯉節 勝雄武士

但、香物ハ沢庵漬ヲ長五寸二切、二ツわりにして仰向に置也、右三色水引ニ結ふ也、

歌ニ云、敵にはうしろをみせぬ剛のものの真先かけ (魁) て打勝雄武士、此歌久太夫花石君とも申、又ハむかしより言伝ともいふ、

一、菱餅常ハ十二、閏年ハ又上ニ壹枚置合十三なり、

一、赤ハ小豆入なり、

一、海老二 た、一 勝栗二 かや五 数の子七 俵物二 ところ三

又ハ かつをふし からすみ (手柄之意) 梅干 (魁花之意)

近年略メ梅花、香物、かつをふし三品也、

右七色菱餅の上ニ其俵置なり、

一、昆布一枚 のし一片 柿一串

右三色一ツニ紙包て水引ニて結びし餅の上ニおなしく置也、

一、根引小松壺本 藪柑子壺本 大根かうの物一 田作 根笹

右五色ハ水引計にて結び置なり、

一、正月五日之祝ゑんきやうの鏡の飾様、右にすこしも替所なし、但

し、少し違所ハ色目二ツ宛なり、

(22)

一、江戸殿其外へ被下の鏡ハ菱も右之通りにて上ニ

海老 田作 た、 功の物 勝くり 黒豆 のし

近年略之上の三種也 (又ハ三種わ、香物、梅花、勝雄ふし)

右七色置折敷ニ杉原敷て被下候事、

一、右之通二候へ共、近代菱餅左右二六ツツ、以上十式枚重ねても置

なり、是も閏年ハ又上ニ一枚メ十三なり、

一、元日の祝言三方二可組物ノ事、杉原式枚其上ニ白米しき上ニ

かちくり 柿 蕪 きりこの餅 のし とち大豆 (本ノマ、) と

ころ 海老二ツ きんばた、 (本ノマ、)

右、御所様始御惣客へ上ル、

右此書者 金龍寺殿御代被補関東簾頭之時、准京都上吉良殿之例、

弓馬并武家式礼被定置之所、猶又今度参考 西條殿御本而、令増補

省略書写者也、

天正十五年八月廿三日 関 加賀守在判

石井石見守在判

天和元年辛酉十二月再興了、

吉良家老江戸氏末裔

喜多見久太夫在判

(23)

右、当家伝来累代秘藏之書、更書写畢、

天明六年丙午三月日 石井市郎右衛門兼昌在判

一字内藏助名広昌

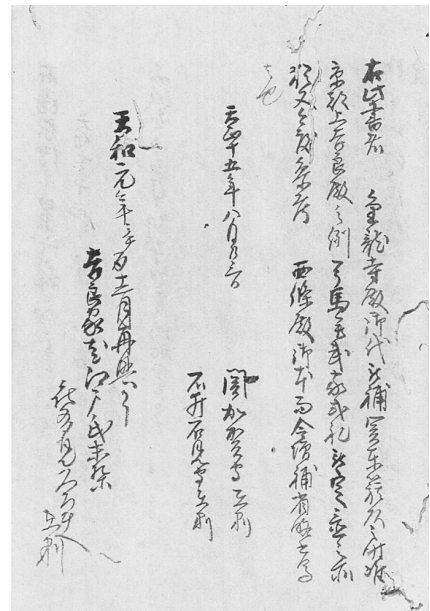
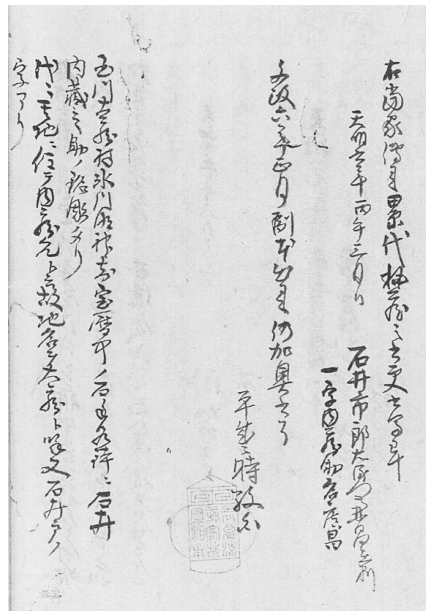
文政六年正月、副本出来、仍加奥書了、

平盛時敬白

〔吉良流武家故実相承〕の印アリ

玉川大藏村氷川明神前、宝暦中ノ石手水鉢二、石井内藏之助ノ銘彫
タリ、代々其地ニ住テ内藏允ト云故地名ヲ大藏ト呼、又石井戸ノ字
アリ、

〔南葵文庫、購入古本、紀元二千五百六十三年、明治三十六年十二月
廿二日〕の印アリ



三、史料解題

(一) 伝来過程

奥書によれば、本史料は十六世紀末に武蔵吉良氏が「西條殿」すなわち、三河西条吉良氏の吉良流札法書を参考にして自らの札法の不足を増補したり不要を省略したりして書写したものである。ここから、戦国期の武蔵吉良氏及び、三河西条吉良氏が既に札法を所有していたということが窺えるが、武蔵吉良氏の札法は『北条幻庵覚書』からも窺えるので確実である。そうした武蔵吉良氏の札法は十四世紀末から十五世紀初にかけてその存在が確認できる「金龍寺殿」すなわち武蔵(奥州)吉良頼治の代に成立したと奥書にはある。但し、武蔵吉良氏と札法との関係が戦国期以前にまで遡ることを示す史料は現時点ではまだ発見されていない。よって、戦国期の段階で自らの札法の起源を頼治とする「歴史」が武蔵吉良氏にあったとひとまず考えておきたい(以上の点については改めて後述する)。

さて、武蔵吉良氏は天正十八年(一五九〇)の小田原合戦によって没落するが、奥書によれば、十七世紀後半に武蔵吉良氏家臣であった喜多見氏(江戸氏)の手により吉良流札法は再興されたという。なお、吉良流を再興した喜多見久太夫(重勝)は、喜多見流茶道を創始した人物として有名である。⁽²⁾しかし、その重勝没後の喜多見氏は、徳川綱吉の寵愛を受けてその側用人人となり、二万石の大名にまで成長した重政の代を迎えた直後、刃傷事件によって改易の憂き目に遭い、早くも十七世紀末には滅んでしまう。⁽³⁾

その喜多見氏の蔵書を継承したのが石井氏であった。⁽⁴⁾当時の当主、

石井兼重(実は喜多見重勝の子)は十七世紀末、喜多見氏滅亡の直後に自邸に玉川文庫を創設した。⁽⁵⁾その玉川文庫の蔵書印が本史料にも押されているので、『吉良流四卷書』が玉川文庫にあったことは確実である(なお、本史料には「吉良流武家故実相承」という印も押されているが、これも玉川文庫の印である)。⁽⁷⁾そして奥書によれば、以後、兼重の子孫である石井広昌がこれを書写し、その子、石井至毅(平盛時)の代に至ってこの写しができたという。

その後、この『吉良流四卷書』は考武館(詳細不明)を経由して、明治三十六年(一九〇三)十二月二十一日、南葵文庫がこれを古本として購入したことが奥印から分かる(この『吉良流四卷書』は『南葵文庫蔵書目録』にも見える)。因みに、この日、南葵文庫は様々な礼法関係書籍を購入していることが他の史料の奥印から窺える。そして、関東大震災の後、大正十二年(一九二三)から翌十三年(一九二四)にかけて本史料は東京帝国大学付属図書館に寄贈され、今も南葵文庫旧蔵書として東京大学総合図書館に存在する。以上の流れをまとめると次のようになる。

武蔵吉良氏↓喜多見氏↓石井氏↓考武館↓南葵文庫↓東大

(二) 中世史料として

① 関加賀守

次に、内容の検討に移りたい。まずは、奥書部分の検討から始める。奥書によれば、最初、本史料は天正十五年(一五八七)八月二十三日に関加賀守と石井石見守との手によって書写されたものだという。

まず、関加賀守であるが、天正十年(一五八二)八月二十三日に、武蔵吉良氏当主の吉良氏朝が、本拠地の一つである世田谷の勝光院に

客殿を建立するのにあたつて、「関加賀守法名全長」なる人物が「本尊（虚空蔵也）寄進之本願」を務めていることは注目される⁽⁸⁾。また、小田原合戦により武蔵吉良氏が没落した後の天正十九年（一五九二）、「関加」なる人物が世田谷の検地役人として二度登場していることも注目される⁽⁹⁾。さらに、天正二十年（一五九二）には、武蔵吉良氏と関係の深かった世田谷の勝国寺に「当所住 関加賀守朝種」なる人物が「葉師如来三尊像」を「奉彩色」にあたつて「三尊薄之願主」を務めていることも注目される⁽¹⁰⁾。以上から、本史料の奥書に出てくる関加賀守を、武蔵吉良氏家臣として登場する関加賀守の関係者として比定しうるところである。なお、『小田原記』の中に武蔵吉良氏家臣として「関加賀守」が見えることも参考までに記しておく⁽¹¹⁾。

② 石井石見守

次に、石井石見守であるが、永祿八年（一五六五）正月十九日に、武蔵国荏原郡石井戸郷大蔵村氷川大明神第四ノ宮を再建するのにあつて、「石井内匠助平兼実」なる人物が「大旦那」を務めていることは注目される⁽¹²⁾。しかし、これ以上の史料はないので系図を参考にしてみると、『石井系図』によれば、先に登場した石井兼実の後継者として「石井兼綱（石井石見）」なる人物が見られる。この石井石見守に関して、『石井系図』は「始、久世三郎兵衛源宣綱、実、三州久世氏ノ族ナリ、始、岡崎、天正十一年、督姫ノ供奉シテ小田原ニ来リ、後、武州世田谷ニ移リ兼実ノ没後、石井ヲ冒シテ嗣トナル」とする。これによれば、天正十一年（一五八三）以降に石井石見守は武蔵吉良氏の所領、世田谷に下つてきたということである⁽¹³⁾。或は史実かも知れないが、同時代史料からは確認できない。ただ、『吉良流四巻書』は「世田谷御所」、「江戸殿其外」などの文言があるように武蔵吉

良氏の礼法に関する書であり、また、先にも見たように関加賀守という武蔵吉良氏家臣の署判もある以上、関加賀守と連署している石井石見守もまた、武蔵吉良氏家臣、或はその関係者とみなすのが自然であろう。

③ 金龍寺殿

そうした武蔵吉良氏家臣、或はその関係者が書写したと考えられる『吉良流四巻書』であるが、その奥書によれば、「右此書者、金龍寺殿御代被^レ補関東旗頭之時、准^二京都上吉良殿之例^一、弓馬并武家式例被^二定置^一之所」とある。

その「金龍寺殿」であるが、各種『吉良系図』から、武蔵（奥州）吉良氏当主の吉良頼治に比定できる⁽¹⁵⁾。荻野三七彦氏によれば、頼治は他史料によつて十四世紀末から十五世紀初にかけてその活動が確認できる人物だ⁽¹⁶⁾という。さて、奥書によれば、頼治が「被^レ補関東旗頭」とあるものの、頼治が「関東旗頭」に補任されたということは史実として確認できず、また、そもそも「関東旗頭」についても分からない。但し、石井家本『吉良系図』によれば、「応永五年戊寅五月、相国義満公ノ時、命シテ武家ノ式礼ヲ定ム、（略）両吉良、今川、渋川ハ武者頭也、参州吉良京兆満貞ト今川上総介範忠トヲ西ノ武者頭ト号、世田谷頼治ト渋川右衛門佐義行トヲ東ノ武者頭ト号⁽¹⁷⁾」とあることは興味深い。もちろん、吉良満貞と渋川義行とが十四世紀後半の人物で、今川範忠が十五世紀前半から中葉にかけての人物であるという时期的な相違が見られ、また、そもそもこうした言説は史実として確認できない⁽¹⁸⁾。しかし、『吉良流四巻書』の奥書からは、頼治が関東旗頭に補任された、そのとき武蔵（奥州）吉良氏でも三河西条吉良氏に倣い弓馬や武家の式例を定めた、という「歴史」（言説）が、近世以前、

天正十五年（一五八七）の段階で既に語られていたという事実自体は注目されるであろう。

④ 吉良流礼法、その発生の起源と書写の背景

続いて、奥書の「猶又今度、参_三考 西條殿御本_二而、令_三増補省略_一書写者也」についてであるが、ここには、天正十五年（一五八七）の段階で武蔵吉良氏が三河西条吉良氏の吉良流礼法書を手し、それを参考に増補省略して書写したとある。ここから、天正年間には三河西条吉良流の礼法書が存在していたことが分かる。従来、吉良流礼法は、近世初期に三河西条吉良義冬が確立したとされてきた。¹⁹しかし、この奥書によって十六世紀末には既に三河西条吉良氏の吉良流礼法書の存在が確認できるため、少なくとも戦国期にまでは確実に吉良流の発生源を遡らせることができる。となると、この頃、十六世紀中葉に今川氏によって三河から駿河へと護送され、京都、遠州、参州と自らの所領、関係地域の一切を失うという状況にあった三河西条吉良氏が、そうした中でも吉良流の宗家として存在し、武蔵吉良氏にそれを伝えるなど吉良流は死守していた様子が窺えて大変興味深い。というのは、まず、三河西条吉良氏については、十六世紀中葉の駿河護送後から、近世になって突如「高家」として現れてくるまでの間、史料にほとんど登場せず、従来その動向は不明であったが、本史料からその間の同氏の吉良流の宗家としての存在、吉良流の死守という動きが分かるからである。そしてまた、こうした戦国期の営為こそが、近世の同氏の「高家」（故実家）としての台頭を準備させたものであったと考えられるからであり、実際に、慶長十年（一六〇五）には徳川家康が「吉良流昇殿」を尋ね（『舜旧記』慶長十年四月十二日条）、その後、三河西条吉良義弥は「高家」として登場するに至るのである。幕府にとって

朝廷との関係を進めていく上で吉良流は必要であったのであり、吉良氏はそれを宗家として中世と近世との間で死守していたのである。

（なお、小林輝久彦氏の御教示によれば、西尾市岩瀬文庫蔵『吉良躰書』もまた天正十五年（一五八七）の文字があり、戦国期の三河西条吉良氏が吉良流礼法書を所有する様子も窺えるという。同書の調査については今後の課題としたい）。

最後に、なぜ武蔵吉良氏が天正十五年（一五八七）に吉良流礼法を書写する必要があったのかという点についても触れておきたい。理由が史料に明示されているわけではないが、考えられる背景としては、天正末年頃の武蔵吉良氏の家督交替（吉良氏朝から吉良氏広へ）、²⁰或いは、正確な時期はなお不明ではあるが、吉良氏広と小笠原康広の娘との結婚という事態などが可能性の一つとして想定されるところであろう。さらなる検討は今後の課題である。

以上でひとまず奥書部分の検討を終え、続けて今度は吉良流礼法の具体相についての検討を行う。

⑤ 『北条幻庵覚書』との関係

さて、武蔵吉良氏が既に独自の礼法を所有していたということは先に述べたが、それについてここで改めて『北条幻庵覚書』²¹から確認するとともに、吉良流礼法の具体相についても窺えるところがあれば併せて見ていくことにしたい。なお、『北条幻庵覚書』とは、永禄三年（一五六〇）、北条幻庵の娘が吉良氏朝のもとへ興入れするに際して、幻庵が娘に作法や心得などについて説いて送ったものである。²²

まず、その『北条幻庵覚書』によれば、「しうけんのときのもやう、あなたのしたてしたる人の申やうにせられ候へく候」とあり、また、「大きくさへなにと申なと、たつね申候とも、おほえ候ハぬと返たう候

へく候」ともある。つまり、後北条氏家臣の大草氏の作法ではなく、武蔵吉良氏が所有する作法をこそ重視するように嫁入りする娘は幻庵から言われていたのであり、吉良流の存在というものが確認できる。

さて、『北条幻庵覚書』によれば、「正月、くわんさんよりか、ミ、子のひ、七日、十五日いわる」、「三月三日、五月五日、みな月、七月七日、八さく、九月九日」の武蔵吉良氏の年中行事に関して、「大かたとの此とし月なされつけたることくにて候へく候」とあるが、「正月」の「か、ミ」については、『吉良流四卷書』にも「世田谷御所にて正月御具足鏡飾の事」、「江戸殿其外へ被下の鏡」とあり、『吉良流四卷書』からはより詳しくその実態を窺うことができる。

続いて、『北条幻庵覚書』には「さためてつねの三こんにて候へく候」、「つねの三こんにて候ハ、へちきなく候ほとにやうかましく申されましく候」と、幻庵が通常の式三献を想定していたことが窺えるが、しかし、『吉良流四卷書』にある通り、また、次節で考察する『吉良流纂二百五拾ヶ条』からも窺える通り、吉良流は「先引渡に長鮑、昆布、栗、又其次に雑煮、吸物」と、雑煮三献なのであった。但し、『吉良流四卷書』には「老番に引渡し」、「二番に打味」、「三番二わたり」と、通常の式三献の様子も書かれており、三献の実態についてはなお検討の余地がある（他にも、髪結では本文と図との間に相違が見られるが、これは次節で考察する『吉良流纂二百五拾ヶ条』を参照すると、図の方の「行」と「草」という文字が逆になって書かれてしまっているということに気付くなど、『吉良流四卷書』には慎重に検討すべき点が見られる）。

最後に、『北条幻庵覚書』は「引わたしのとき、くハへの事、くハへハいて候へとも、くハへ候ハぬ物也」、「しき三こんのときハもちろ

んにて候」とする。しかし、『吉良流四卷書』は「老番に引渡し出、女房吞初て二度加へへし、さて男の方へ行へし、先男是も二度加るなり」、「いづれも二度ツ、加る也、以上、三々九度なり」とある。一献目の加えの様子についてもまた相違が見られる。

このように、その内容の全てが戦国期にまで遡るかどうかは慎重に考えなければならぬものの、『北条幻庵覚書』と比べてみることで、『吉良流四卷書』の特徴や両書の共通点、相違点などが分かる。

次に、時代は近世に移るが、吉良流礼法その他写本と比べてみることで、『吉良流四卷書』の特徴や、吉良流礼法の具体相、写本間の共通点、相違点などについて検討していくことにしたい。

(三) 近世史料として

① 『吉良流纂二百五拾ヶ条』との関係
早速、吉良流他写本との比較検討をしていきたい。比較する他写本としては、直接参照できた『吉良流纂二百五拾ヶ条』（国立国会図書館蔵）を用いる。同史料は近世に各所に広く伝わった吉良流礼法書の中の一冊である（但し、正確な伝来は不明）。なお、同史料は非常に大部であるため、必要に応じて関係する部分の翻刻、内容を提示するに留める。

まず、比較して最初に気付くのは、「増補省略」とある通り、『吉良流四卷書』には増補、省略が多いということである。増補に関しては、例えば、「世田谷御所」や「江戸殿」など武蔵吉良氏に関係するものは当然、『吉良流纂二百五拾ヶ条』には見えない。

しかし、とりわけ目につくのは省略に関してである。例えば、岩田帯について『吉良流四卷書』は「いはた帯ハ、す、しのきぬ長サ八尺

四ツにた、ミて其男ゆふなり」と簡潔に書くが、『吉良流麩二百五拾ヶ条』はさらに「婦人懷妊して五ヶ月めに肌に帶する事あり」、「此ときハ子を多持て幸ある人を帶親として帶を請てすべし」、「其端に妊子の父の名字名乗を書付、昏に包、水引にて結、長蛇包添て」などとより詳しく書く。また、『吉良流四卷書』は「懷妊の帶祝」、「喰初」の順に続けるが、『吉良流麩二百五拾ヶ条』はその間に「七夜の祝」、「宮参」などを入れている。

このような同内容の事柄の増補、省略は他にもかなり見られるが、内容それ自体の異同もまた散見されるところである。例えば、正月の具足餅の飾について、台の上、鏡餅の下に敷くものを『吉良流四卷書』は「白米敷」とするが、『吉良流麩二百五拾ヶ条』は「昏を敷、したを敷」とする。また、紅白二つの鏡餅の間に敷くものを『吉良流四卷書』は「鏡と鏡との間にしたを敷」とするが、『吉良流麩二百五拾ヶ条』は「式つの間にゆつり葉を置」とする。さらに、鏡餅の上、菱餅の下に敷くものを『吉良流四卷書』は「菱と鏡との間ニ讓葉をし」とするが、『吉良流麩二百五拾ヶ条』は「言及がない。他にも、餅に添える七色について、海老、橙、勝栗、榎、数の子、俵物の六つは共通するが、残り一つを『吉良流四卷書』は野老、『吉良流麩二百五拾ヶ条』は柑子とする。また、喰初についても『吉良流四卷書』は「百廿日といふ日」とするが、『吉良流麩二百五拾ヶ条』は「百十日目」とする。

以上、『吉良流麩二百五拾ヶ条』と比べてみることで、『吉良流四卷書』の特徴や両書の共通点、相違点などが分かる。他の写本との比較、さらなる検討は今後の課題である。

さて、『吉良流麩二百五拾ヶ条』と比べてみることで、『吉良流四卷

書』には散逸があることも分かる。では、続けてその散逸について、見ていくことにしよう。

②吉良流礼法、その失われた部分を求めて

さて、その『吉良流四卷書』の散逸であるが、『吉良流四卷書』は、東京大学総合図書館のカード目録でも「零本」とされ、また、『国書総目録』でも「欠本」とされているなど、既に散逸が指摘されている。では、その散逸の程度であるが、それは『吉良流四卷書』の中から窺うことができる。というのは、本史料冒頭部には「貞」、「艮坤」という文字があるのだが、この「貞」という文字からは易の「元亨利貞」が、また、この「艮坤」という文字からは八卦の「乾兌離震巽坎艮坤」がそれぞれ想起されるため、「元亨利」、「乾兌離震巽坎艮坤」がそれぞれに気付くからである。つまり、本来は題名通り全部で四卷存在したのであるが、いつの間にか全体の四分の三が失われてしまい、その結果として残った四分の一を今、こうして翻刻、解題しているというわけである（それゆえ、全体の四分の三に該当する部分がいくつかどこから出てくる可能性はある）。

失われた部分の行方に関しては不明とせざるを得ないが、では、失われた部分の内容に関してはどのようなものであったのだろうか。そこで、『吉良流麩二百五拾ヶ条』や宮腰松子氏、綿拔豊昭氏の吉良流に関する研究⁽²³⁾などを参看すると、武芸関係の記事が『吉良流四卷書』からは抜け落ちていることに気付く。後で見ると、それは弓術や馬術といった武芸関係の吉良流礼法が江戸期にまで確実に継承されていることから推断できる。

では、その江戸期における吉良流礼法の継承とはどのようなものであったのか、実際に見ていくことにしよう。

③喜多見重勝

まず、奥書によれば、武蔵吉良氏の没落ともに廃れた吉良流を再興させたのは、喜多見久大夫重勝であった。重勝は喜多見流茶道を創始し、喜多見氏の発展を準備した人物として名高いが、そうした「吉良家老江戸氏末裔」の彼が、吉良流を継承、再興させていたという事実は興味深い。

ではなぜ、重勝は吉良流を再興させたのだろうか。そこで、喜多見流茶道について見てみると、その茶道は「権威」と深く結びついた極めて政治色の強いものであって、これを享受する武士たちにとってはその素養の有無が自家の繁栄に影響しかねない一大関心事であった。⁽²⁴⁾

また、当時、吉良流を有する吉良氏は、故実、儀礼の「権威」として高家の役を全うしている時期でもあった。

こうした中で重勝は、中世武家の礼的秩序において、足利將軍家に次ぐ高い「権威」を有した吉良氏の名を持ち出し、その吉良氏の吉良流を再興、継承することにより、茶道の「権威」としての自らをさらに「権威」付けようとしたと考えられるのではないだろうか。ひとまず、以上のように考えておきたい。

喜多見氏は十七世紀末に滅亡する。その喜多見氏の蔵書を継承したのは、喜多見氏と同じく世田谷にいた石井氏であった。

④石井広昌

さて、天明六年（一七八六）の奥書によれば、「石井市郎右衛門兼昌、一字内蔵助名広昌」が書写したとある。

まず、事実関係から確認しておくと、石井家の家系を探索した石井広昌の口授を後継者の石井至毅が筆記した書物『鶴の毛ころも』⁽²⁵⁾によれば、広昌は自身を「おのれ広昌、はじめの名ハ兼昌と云、是ハ大伯

父森江兼置ぬしの授玉ひし所なり、今ハ 今上の御名の字をさけて則、広昌にあらたむ、雅名石井内蔵之助⁽²⁶⁾」と口述しており、奥書と矛盾しないことが確認できる。因みに、この「今上」とは、安永九年（一七八〇）に即位された兼仁（光格天皇）のことである。続けて、『鶴の毛ころも』によれば、「明和五子年より幼名内蔵之助を改めて、市郎右衛門とよぶ、是祖父通兼君の名をしたふ所也⁽²⁷⁾」とあり、明和五年（一七八八）以降、広昌が市郎右衛門と名乗っていたことも判明するが、これも奥書と矛盾しないことが確認できる。

その広昌は、玉川文庫を創建した三代前の当主、石井兼重（道林）以後、天災により疲弊し傾いていた石井家の家運を挽回することに努め、また、喜多見流茶道や家伝文化の継承、復興に尽くした人物でもあった。⁽²⁸⁾ そうした広昌が継承すべき家伝文化には、吉良流武家故実の相承も含まれていた。というのは、子の至毅が菅原道真と北野天神について考察した『昔むしろ』⁽²⁹⁾の中に「道林君已来江戸浪宅之所業ハ吉良流武家故実指南」とあり、また、『吉良流四巻書』にも石井家伝来累代秘蔵の書とあるので、石井氏に吉良流が継承されていたということが窺えるからである。

すなわち、他の様々な文化と同様、吉良流礼法も喜多見氏から石井氏に伝わっていた。しかし、石井氏の家運とともに吉良流武家故実の相承もまた衰退していた。それを広昌は復興させたのであった。

⑤石井至毅

文政六年（一八二三）の奥書によれば、最終的にこの写本を作ったのは、広昌の子、至毅であった。

広昌の後継者である至毅もまた文人としての能力を遺憾無く発揮し、江戸幕府編纂の大百科事典である『古今要覧』の編纂御用に任じられ、

後には幕府の書物奉行を務め、家や郷土の歴史研究も広く行った人物であった⁽³¹⁾。その至穀もまた広昌と同じく「弓術、家伝吉良故実相承」、「馬術、家伝吉良故実相承」など「武術修行」として吉良流武家故実の相承を行っている⁽³²⁾。また、至穀の自伝である『梅樹一代要記』⁽³³⁾の中には、石井家の「家瑞和歌三首」の一首として「吉良流相承具足餅祝のうた 敵には後ろをみせぬ剛のもの（香の物仰向て）真先かけ（梅花魁）て討勝雄武士（松節）」の歌も見える⁽³⁴⁾。また、この歌は『菅むしろ』の中にも「申伝の歌あり」として見える⁽³⁵⁾。

吉良流武家故実の相承を行い、また、優れた文人として数々の著作を残し、信頼に足る史料集を編纂、書写した至穀その人であったがゆえに、彼はこの『吉良流四卷書』の写本もまた作成したのであろう。

四、おわりに

吉良流礼法に増補、省略、異同が見られることは既に述べたが、改めて『吉良流四卷書』を見ると、「近年略」という文言が散見される。また、「喜多見久太夫殿已来」という文言も見られる。吉良流礼法は、現実の様々な時代や場面に応じて、その都度少しずつ変化が生まれ、徐々に織りなおされ、継承されていったものと考えられる。一方で、こうした増補や省略、異同や変化は「純粋な」吉良流礼法を相承するという点では奇異に映る。しかし、それにも関わらず、吉良流としての連続性、同一性は存在し続けたのである。もしかすると、吉良流礼法それ自体の本質的な部分ばかりではなく、それを継承しているという意識や感覚、誇りといった部分もまた重要だったのではないだろうか。論じ残した部分も多く、比較研究など残された課題も多い。また、

翻刻についてもなお完全ではなく、意味や読解についても不明な点が残されている。全て今後の課題であることを確認して、ひとまず本稿を閉じようと思う。

（本稿執筆に際しては、武田庸二郎氏に多大なる御協力を頂いた。記して深謝し御礼申し上げる）

註

- (1) 『吉良町史』中世後期、近世（吉良町、一九九九年）五二三頁～五一四頁。
- (2) 『続石井至穀著作集』（世田谷区教育委員会、一九九二年）二八七頁。『続石井至穀著作集』は以下、『続』と表記する。
- (3) 『石井至穀著作集』（世田谷区教育委員会、一九八九年）二九四頁。『石井至穀著作集』は以下、『正』と表記する。
- (4) 同前。
- (5) 同前。
- (6) 武田庸二郎「石井至穀書写本『公事方御定書』」（世田谷区立郷土資料館 資料館だより）三二、二〇〇〇年）一頁。
- (7) 武田前掲註（六）論文、二二頁。
- (8) 勝光院過去帳裏書（『勝光院文書』『世田谷区史料』第二集、一五二頁～一五四頁）。『世田谷区史料』第二集は以下、『世』二と表記する。
- (9) 勝光院寺領御検地帳（『勝光院文書』『世』二、一二二五頁）。深沢村御検地目録（『大場家文書』『世』二、二二六頁）。
- (10) 薬師如来修造胎内文書（『勝国寺文書』『世』二、一五五頁～一

五七頁)。

- (11) 小田原記〔世〕二、二九四頁)。
- (12) 大藏村永川社棟札写〔世田谷徴古録所収文書〕〔世〕二、一六三頁〜一六四頁)。
- (13) 石井系図〔世〕一、三五六頁)。
- (14) なお、『寛政重修諸家譜』には、督姫に供奉して後北条氏に入った人物として、秋鹿政朝、石川吉次、鶴殿長次、江川英長、中村尚光、矢部芳英などの名が記されている〔大日本史料〕一編四冊、八九三頁〜九〇二頁)。
- (15) 吉良系図〔世〕一、三三三頁)。
- (16) 荻野三七彦『吉良氏の研究』(名著出版、一九七五年)四一頁〜四二頁)。
- (17) 前掲註(一五)。
- (18) 二木謙一『中世武家儀礼の研究』(吉川弘文館、一九八五年)四五五頁〜四五六頁)。
- (19) 前掲註(一)書、五一二頁〜五一三頁)。
- (20) 北条氏直書状写〔尊経閣文庫所蔵古文状〕『戦国遺文』後北条氏編、第四卷、三一七頁)。吉良氏広判物写〔江戸文書〕〔世〕二、一七一頁)。
- (21) 北条幻庵覚書〔世〕一、一三六頁〜一四四頁)。
- (22) 武田庸二郎『北条幻庵覚書』の作成年代について〔世田谷区立郷土資料館 資料館だより〕二七、一九九七年)七頁〜八頁。仲澤香織『北条宗哲覚書』とその成立〔駒沢大学史学論集〕三五、二〇〇五年)四一頁〜四九頁)。
- (23) 宮腰松子『吉良流祝膳の献立(一)』〔神戸女学院大学論集〕

一五、一九六九年)。同〔同〕二〔同〕一六、同年)。同「吉良流の研究」〔同〕一七、一九七一年)。綿拔豊昭「臨川寺所蔵『吉良流礼法書』について」〔書籍文化史〕二、二〇〇一年)。

- (24) 前掲註(二)書、三〇〇頁)。
- (25) 前掲註(三)書、三一七頁)。
- (26) 鶴の毛ころも〔正〕、三九頁)。
- (27) 鶴の毛ころも〔正〕、四三頁)。
- (28) 前掲註(三)書、二九五頁)。
- (29) 前掲註(二)書、三〇四頁)。
- (30) 菅むしろ〔統〕、九六頁)。
- (31) 前掲註(三)書、二九七頁〜三〇二頁)。
- (32) 菅むしろ〔統〕、一三〇頁〜一三一頁)。
- (33) 前掲註(二五)。
- (34) 梅樹一代要記〔正〕、二頁)。
- (35) 菅むしろ〔統〕、五九頁)。
- (36) 武田庸二郎「石井至毅編『世田谷徴故録』、『続世田谷徴故録』について」〔世田谷区立郷土資料館 資料館だより〕四六、二〇〇七年)一頁〜七頁)。